に學士が軍の義なりといふ乫（學士は之を tu, tyu, ti の音なりといはる）を以て、戰の義なる šagor, šari, cherig 等の頭音 ša, che の更に訛りたるものなりと見らるゝに至りては、其の可なる所以を知らずといへるに對して、白鳥博士の東胡民族考、或は Gabelentz の滿洲字書を引き來りて、

čerig は必ずしも戰の意味のみに非ず、čooha は必ずしも軍の義に限らるゝに非ず、兩者同一の語にして、共に軍の義も有し、戰の義も有するなり、論者が之を別々に解釋せんとするは如何なる意なりや、重ねて說く所あるを要すと、

余が特に鈔哈（čooha）卽ち軍なる語を擧げ來りて、乫もし軍の義と解く可くんば此の語をこそ當つべけれと論じたるは、もとより漢人の譯語の上に於て軍と戰との間に意味の相異れるものあるを認めたるが爲なりしが、未だ語原の論議に入らざりしが爲に、痛く學士の叱責を蒙りたるは恐縮に堪えず、然れども此の際語原の詮索は、果して何の要あるべきや、šagor（遼史禮志及び語解）及び šari（燕北雜記及び華夷譯語中に見ゆる女眞語）と čooha とは其の語原の同一なると否とに論なく、既に形を異にして現はれ居るものにして、漢人は前者の形に對して戰の譯を施し、後者の形に對して、軍の譯を施せるに過ぎず、其の語原の如何に係はらず、また其の含有せる意味の廣狹如何に係はらず šagor, šari を戰と解し čooha を軍と解したるものにして、彼等は此等の兩語に對しては、音聲の上よりはいふ迄もなく、其の解釋に於ても截然たる區別を立てたりしを疑がはず、（思ふに漢人にかゝる語を敎えたる契丹人、女眞人自からも、此等の兩語が語原を同じうし、また相通ずる意義を持ちしにも係はらず、戰の義の時は主に šagor, šari を用い、軍の義の時は主に čooha なる語を用いたるものなりしなるべし）、畢竟語原の議論は此の場合に於て用ゆる餘